

連載 プロマネの現場から

第 142 回 「やれば伸びる」という思考法

蒼海憲治 (大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

新年にあたって、その年の目標を立てる習慣のある方は多いと思います。毎年、仕事だけでなく、趣味や私生活面での目標を含めると 10 個程度立てています。特に、上海にきてからは、海外赴任というものが、期限が決まっていない長期の研修の一面もあるため、できることは何でもやろう、という気持ちで日々を過ごしています。

ところで、目標達成にあたってよく聞く言葉の一つに、「やればできる」という言葉があります。「やればできる」が意味することは、実際に世の中のことの多くは「やりさえすればできる」ということを言っているのだと思います。しかし、物事の多くは「やらなければできない」のはもちろんですが、やってみるまでは、普段、「やればできる」と思っている、いざやろうすると、簡単にはできなくてつまづいてしまう、「やってもできない」というのはよくあることです。

「言うは易く行うは難し」と同様に、見聞きしていれば簡単に思えることでも、自分でやってみればできないこと、「やってみるまでわからない」ことは多いものです。

それはなぜなんだろうかと漠然と思っていたところ、先日、タレントの武井壮さんのツイッター (*1) のコメントを読んで、腑に落ちました。

武井さんは、十種競技の元日本チャンピオンで、「百獣の王」を目指しているといわれるように、バラエティなどでもいろんなことにチャレンジされています。

武井さん曰く、『やればできる』なんて嘘ですよ、だと。」

「当たり前だ、その人の努力、感覚、体格、知性、知識、性格、顔、表情、声、発言、行動、指導、環境、経済力、家系、人脈、運、精神力、生活圈や国、そういったもの全ての総合点で勝負は決まる」から、と説明されています。

単に、「やる気」だけでできることもあります、多くのことは、武井さんの言う総合的な力、条件が揃って、初めて実現できます。

しかし、その一方で、「でも知識、発言や行動は自分で努力して変化を起こす武器なんだよ」といい、必要な力を高めたり、条件を揃えていく日々の努力が大切なことも同時に指摘されています。

成功には、GRIT（グリット：やり抜く力）が必要といわれますが、その理由は、総合点を高めていくためには、一つのポイントだけではなく、複数のポイントを改善していく必要があります、一朝一夕ではできないため、「継続した努力」が必要となるのです。

このあたりのことを、とても分かりやすく説明しているのが、このお正月に手に取った坪田信貴さんの『才能の正体』（*2）にありました。

坪田さんは、ビリギャルで有名な「さやかちゃん」を育てた学習塾の先生です。

坪田さんは、学習塾の講師を務める中で、「まず取り組んだのが、「才能がある／ない」「頭がいい／悪い」「地アタマがいい／良くない」というように二元論的に人を分ける考えは間違いだ、ということを実証すること」だったといいます。

このことを証明するため、塾での指導の記録、たとえば、生徒にどんな課題を与え、その結果がどうだったのか等、全部取ったといいます。

このデータを振り返った結果でわかったことは、塾に来た最初の時点では、「地アタマが良くない」「頭が悪い」と言われていた生徒たちが、一流大学に合格したケースが多くあったこと。しかし、その子供が合格した途端、両親を含む周りの人々は、その子供には最初から「才能があった」「地アタマは良かった」と手のひらを返すような発言が相次いだという事例が沢山ありました。

この経験を通して、世の中の人の言う「才能というのは、結果でしかない」という確信を得たといいます。

「いわゆる「才能がある」と言われている人たちがいますよね。

彼ら、彼女らには共通点があります。

それは、みんな努力をしていることです。」

そして、

「「才能がある」と言われている人たちは、
“その人に合った” 動機付けがまずあって、
そこから“正しいやり方”を選んで、
“コツコツと努力”を積み重ねている。

そしてしっかりと結果を出して、そのときに初めて「才能がある」という状態になる。
正確に言えば、「才能がある」と言われるようになる。」

周りの人たちが、「地アタマがいい」「才能がある」というのは、目に見えている結果だけを見て、「努力してきた部分」をすっ飛ばして言っています。

つまり、

「どんな人であっても、結果が出たら「元がいい」「地アタマがいい」と言われ、結果が出なければ「もともと才能がない」と言われるのです。」

ただし、少し怖いのは、

「人は結果しか見てくれない、結果からしか判断しない」ということなのだと思います。

だから、

「多くの場合、「結果」が才能の有無の判断基準になります。これはつまり、結果によって、過去の解釈もすべて変わってしまう、ということでもあります。」

結果による他人の評価の怖さは、誰でも感じていることだと思います。

ところで、他人の評価はともかく、物事が「できる」ようになるには、どうすればよいのでしょうか。

坪田さんは、「やればできる」という思考法をやめることを勧めています。

「やればできる」という思考法は、やってもできないとわかった瞬間に、やることそのものをやめることになってしまうからです。

「これは、「できそうにないなら、やらない」と言っていることと表裏一体なのです。」

つまり、「やればできる」は、「結果至上主義」の思考法なのだ、と。

「継続は力なり」というのは本質的に真実なのです。

問題は、「自分にはできないと認知した段階」で丸ごと諦めてしまうことです。」

そう考えると、「やればできる」は苦しい思考法です。

いつまでたってもできない場合は、思考停止して止めてしまいます。

しかし、物事ができるようになるためには、複数のポイントを改善していくための「継続した努力」が必要となります。

「世の中には「できないこと」がたくさんある以上、大人が子どもに、または目上の方が部下に言いがちな「やればできる」という言葉は嘘になるからです。」

それでは、「やればできる」が嘘なら、どう言えばよいのか？

「こういうときに使うべき正しい言葉は「やれば伸びる」です。」

何事も、やらないよりもやった方が絶対にいいのは間違いありません。

誰でも、何かを始めて、それを継続していければ、やった分だけ成長して、経験した分だけ経験値は増えて、必ず伸びていく。

能力が伸びれば、その「部分」が極立ってきて、「才能」になる可能性がある。」

今年立てた目標の中には、仕事における計画に近いものから、下手の横好きのこともあります。が、「やれば伸びる」の思考法で、倦まず弛まず、継続して取り組んでいきたいと思っています。

(* 1) 武井壮 (@sosotakei) November 15,2019

「『やればできる』なんて嘘ですよ、だと。当たり前だ、その人の努力、感覚、体格、知性、知識、性格、顔、表情、声、発言、行動、指導、環境、経済力、家系、人脈、運、精神力、生活圈や国、そういったもの全ての総合点で勝負は決まる。

でも知識、発言や行動は自分で努力して変化を起こす武器なんだよ。」

(* 2) 坪田信貴『才能の正体』(NewsPicks Book)、幻冬舎、2018 年刊